

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十七回）

「望郷の歌（大宰府官人達）」

「遠の朝廷とおみかど」と万葉集で詠まれた筑紫の大宰府政庁（都府楼とも呼ばれた。）跡は、福岡県太宰府市観世音寺四丁目にある。

今、史跡公園になっている大宰府南門跡に立つと万葉集に詠われた大野山（現・四王寺山）が北の正面に見えるなど大宰府着任後間もなく妻を失くし傷心の大伴旅人等が詠った万葉風景が当時と変わらないと思われる姿を見せてくれる。

大野山は旅人になり代わって旅人の妻の死を悼いたんだ山上憶良が「大野山 霧立ち渡る 我が嘆おきそく息嘯の風に 霧立ち渡る」（巻五―79）
本・筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ第九回に掲載）と詠まれた「大野山（現・四王寺山）福岡県太宰府市、大野城市、糟屋郡宇美町にまたがる標高410mの山」がまじかに望め。

また、南方8キロの遠くに天気の良い日には妻を病で失くした大伴旅人が奈良の都からの弔問使らとともに「橘たちばなの花散る里の ほととぎす 片恋しつつ 鳴く日しぞ多き」（巻八―1473、本・筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ第十一回に掲載）と「記夷オキの城オキ」に登

り詠んだという山「基山きざん（佐賀県三養基郡基山町と福岡県筑紫野市にまたがる標高404mの山。）」が展望できる。

この大野山および基山には天智四（665）年に外国（唐・新羅の連合軍）からの日本への進攻に備えるために朝鮮式山城（大野城と基肆城）が築かれ大宰府政庁の南と北を護る軍事拠点となった。

四王寺山（万葉時代の大野山）の北の麓に広がる大宰府政庁（都府楼）跡は史跡公園として整備され、古いにしえを偲しのぶものはほとんど失われているが、唯一、奈良の都（平城京）や難波につぐ大きさであったといわれる在りし日の政庁を偲しのばせる大きな礎石群が整然と並んでいる。

「目でみる大宰府」（財）古都大宰府保存協会）には、この地に政庁の建物が並び、1000人を超える官人が仕えていたといわれ、地方としては最大級の役所で、その地理的歴史的条件下から、①九州といき 対馬つしま・種子島たねがしま（九国三島）を治める、②外国に対して国を守る辺境防衛、③外交を司るといふ大きな役割があったらうと述べる。大伴旅人が大宰府に赴任したのが、神亀四（727）年末か翌年春頃で都が平城京にあった時である。

都から陸路で行けば十四日、海路で行けば三十日を要する遠く西海（九州地方）の地で大宰府の長官ということを担当ことは、齢六十を

過ぎ、この地で妻を失くした旅人にとっては、心身ともに辛いものであったに違いない。ふたたび都の土を踏むことができるであろうか、旅人の胸中にはそのような思いが込み上げたのであろうか、万葉集には都あるいは大和への望郷の思いがひとしお強い次の歌がある。

かきせりのつかさのすけ
「防人司佑・大伴四綱が歌二首」

よつな
おほきみ

やすみしし 我が大君の 敷きませる

うち

国の中には 都し思ほゆ

卷三—329

作者…大伴四綱

ふじなみ

藤波の 花は盛りに なりにけり 奈

おも

良の都を 思ほすや君

卷三—330

作者…大伴四綱

(解説)

大宰の帥・大伴旅人に同族の四綱が、「天皇を治める国々の内(Ⅱ食

す国)では、奈良の都こそ一番懐かしく思われる。藤の花は盛りになりました。都のことを思いやられますか、あなたは」と歌いかけたものの。

・それを承けて大伴旅人が応えて詠った次の歌がある。

さか

我が盛り　またをちめやも　ほとほと
に　奈良の都を　見ずかなりなむ

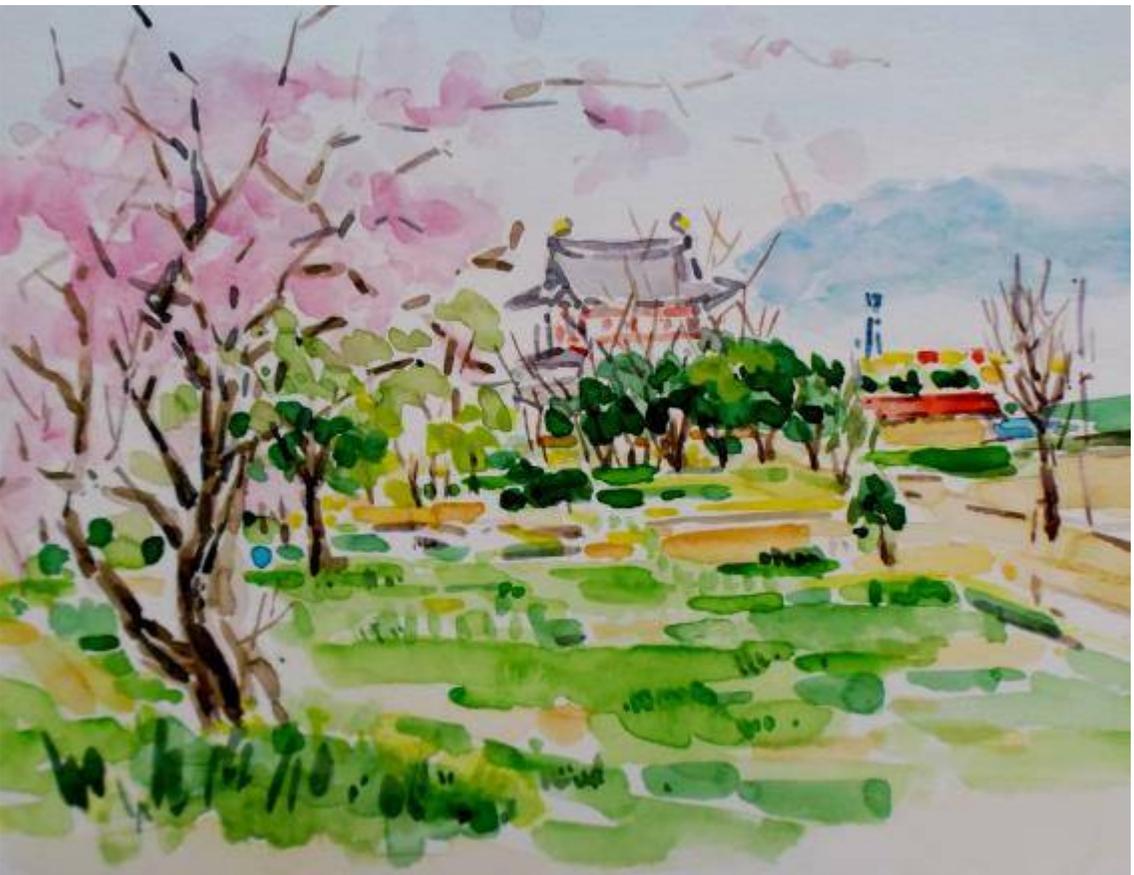
卷三―331　大伴旅人

(解説)

卷三―329、330の歌を承けて「若い時代が再び返って来ることがあるであろうか、もしかすると、奈良の都を見ずにこの大宰府で終わってしまうのではないだろうか」と歌を返している。

(写生地) 卷三―331の万葉が詠われた当時、都であった平城京跡に平成九(1997)年に復元された宮の南門の中でも中心に位置し、最も重要な門である。「朱雀門」^{すざくもん}と周辺に桜の花が満開の平城宮跡風景、遠景に葛城山連峰^{かきひのね}が古代と変わらないと思われる雄大な姿を見せてくれる。

(杏花)



(2) 「平城京の風景」(上田正昭監修・千田稔著)によると天平の

初頭(729年)頃、筑紫大宰府では、時の大宰少弐ださいのしょうにの小野老おのおめの位階いかい

(地位の昇進)を祝う、ささやかな宴うたげが催された。宴の主催者は大

宰府帥(長官)の相伴旅人。宴はいつものように歌会で締めくくられ

ることとなった。昇進の喜び醒めやらぬ小野老は次の有名な歌を絶唱

する。と当時の状況を想定している。

なら みやこ

「あきによし 寧樂の京師は 咲く

にお

花の 薫ふがごとく 今盛りなり」

卷三—328 作者 小野 老

(解説)

奈良の都は、咲く花が美しく照り映える^はように、今盛りであることだ。

・小野老は大宰府の次官である大宰少弐^{ださいのしょうに}の職にあつた時に、大宰府ではるか平城の都を賛美した歌である。

・ことさらにこの歌には望郷の想いと都の美しさに対する彼の憧れの想いがこめられているという。

・この歌が宴の締めくくりの歌会で詠われたと想定されているがその場所は他の宴の開催場所から推定すると主催者の大宰帥・大伴旅人邸であつたと思われる。(古代の三都を歩く・「平城京の風景」上田正昭

監修・千田稔著参照)

・大宰帥・大伴旅人邸は何処にあつたのであろうかと長い間探し続けられてきた。森弘子著「大宰府発見」には今まで一つの論拠とされているのは「万葉集」の歌であつたと述べている。

・大宰府で詠われた大伴旅人の歌には、たとえば次の二首がある。

「わが岡に をじか さ男鹿来鳴く つま 初菼の花 花孀問ひ

に をじか 来鳴くさ男鹿」(巻八―1541)

「わが岳に をか 盛りに咲ける 梅の花 残れる雪
を まがへつるかも」(巻八―1640)

以上の歌のように「わが岡」「わが岳」という表現したものが数首あり旅人の邸が丘の上か岡の辺にあったことを偲ばせる。とある。

現在の大宰府政庁跡は筑紫野大宰府線(筑紫野市大字山家)大宰府市観世音寺2丁目)の途中にある。この沿線には九州国立博物館、観世音寺と大宰府政庁跡があり近くには大宰府天満宮と観光スポットがあり、道路はいつも観光客の車で混雑している。

・大宰府政庁跡入口から四王寺山(万葉集では大野山)が政庁の背景にそびえ、丘は政庁跡の東西2カ所にある。「大宰府発見」で森弘子氏は、政庁跡の西側の小さな丘は今でいえば税務署。西海道(今の九州地方)諸国から収められた物品を保管する蔵を管理した「蔵司」があり、また、政庁跡の東側にある小丘「月山」には当時、漏刻台(水時計)があつてここから時を報じていたと伝えられている。

大伴旅人邸宅と推定される、歌で詠われている「わが岡（又は、わが岳）」は従来から大宰府政庁跡の西北に位置した、「蔵司」があったと推定されている小丘の隣接地にある「坂本八幡宮」辺りが立地条件として有力であるとされてきたが森弘子氏は「大宰府発見」の著書の中で坂本八幡そのものは発掘されていないが「蔵司地区」の発掘調査では、大伴邸跡地である遺跡が発掘されていないことから「ここが旅人の邸跡と云えるだろうか」と疑問をもっていたところ、最近の学説から、難波京や平城京など他の宮の遺跡との比較検討などから万葉集で詠われている岡を政庁の東に隣接する「月山」の地が有力候補ではないかとしている。いずれにしろ確定的なことがわかっておらず、まだまだ万葉時代の謎、ロマンが続くのではないかと感じた。

（参考文献）

・森弘子著「大宰府発見」海鳥社・千田稔著「平城京の風景」文英堂・「都府楼・特集万葉集」・「目でみる大宰府」（財）古都大宰府保存協会　・「函説・日本の古典・万葉集」集英社　他

（写生地）大宰府政庁南門跡付近から旅人邸跡の有力候補と云われる

「月山」南麓付近を描く。丁度、梅の花が満開であった。手前の建物

は「大宰府展示館」。（杏花）



◎大宰府政庁跡平面図



◎大伴旅人邸跡推定地